

interview

MASAAKI SUZUKI

2大バッハ作品へ 表現者としての挑戦

鈴木雅明／バッハ・コレギウム・ジャパン

取材＝長野隆人（フリーライター）

《マタイ受難曲》をいつ聴いたという定かな記憶がないけれど、有名な曲だから聴いてはいましたよね。自分で初めて演奏したのは1991年です。いずみホールで1周年で演奏して、あと上野学園メモリアルホールで演奏したんですが、それは僕にとっては感動的でしたね。

ともかくキリストの復活祭の前にやるというのが、この曲の意味から言うと当然一番重要なことです。僕は、マタイは周期的にやるものだという認識が日本でも生まれるようになっていいなと思ってやってきました。

ただ我々（BCJ）の場合は、もちろん聖書のメッセージを伝えたいという僕自身の信仰的な意味もあるけれど、たとえば教会の礼拝の中で演奏しなきゃいけないと考えているわけではないし、日本の場合は演奏会場でやる「べき」だと思ってますね。演奏会場で、演奏会としてやることで、音楽の機能がもっとも十全に現

れ出ると思っていますから、そういった面では、全然オリジナルではないのです。バッハはそんなことはしなかった。バッハは明らかに金曜日の礼拝か、あるいはその前の日曜日の礼拝の中でしか演奏していないわけですから。

《マタイ受難曲》の音楽でどういふことを表現したいか。たとえば、すごく劇的な面を強調したいのか、あるいはそのリリックなところを美しくやりたいのか、あるいはその聖書のメッセージを伝えたいと思うのかという、そういう様々な演奏の「目的」というものによって、演奏は変わってくると思います。

メンデルスゾーンは、1829年に《マタイ》の復活上演をしたことでとても有名なんですが、実際問題演奏したのは、2／3くらいでしかない。実は様々な変更を加えているけれども、それは作品を改ざんすることが目的ではなくて、曲が持っているドラマティックな劇性だとかメッセージを当時の人たちによりわかりやすく伝えよ